

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 折井善果

折井さんの研究は論文題目「ルイス・デ・グラナダと日本 キリシタン文学における日西文化の比較研究」に示されているように、16世紀近世スペイン文化とその影響下にある日本のキリシタン文化の比較研究が主眼となっている。その目的のため、当時の修徳思想家・フマニストであるルイス・デ・グラナダとその著作のキリシタン訳との対訳分析を方法論とする。この比較研究とテキスト分析が独創的であるのは口述のように、グラナダを軸として一方ではラテン中世（トマス思想）に軸足を伸ばし、同時にキリシタン時代の日本語日本文化にも深く研究が行届いている点である。

本論文の構成は三部七章に分かれその内容は大略以下の通りである。序では如上の研究目的・方法論及び先行研究が述べられた後、第一部「ルイス・デ・グラナダ - 生涯および著作とその受容 -」は三章構成で文献学的・歴史的な資料が広汎に渉猟されている点が大いに評価できる。その結果、当時のスペインのフマニズム・グラナダの言語用法や人物像が見事に示されている。

第二部「日本で支持された理由 - ルイス原典の文体・構造・思想上の特質から考える」は二章構成で、ルイスの著作がトマスの自然神学に基づきながらもさらに一歩進んで実践的具体的倫理の性格を帯び、かつ読者日本人の審美的感性に訴える修辞学的性格を帯びていることが日本人に受容される主な契機になったことが示されている。

以上のようないわば予備的研究を下地にして第三部で本格的に「キリシタン文学における異言語・異文化接触 - 神と人の関係性をめぐる共鳴・変容そして断絶」のテーマが考究されうる。まずルイスの応報主義的实践倫理が、浄土真宗の蓮如期における応報観念や祈願請求的念仏業の教義的背景から日本語に容易に転換されるに至りえたことが論述される（五章）。次に「報謝」が仏教では人間の仏に対する報謝の一方向的意味が、キリシタン文学にあって人から神への方向のみならず、神から神人キリスト論を媒介にして神から人への方向をとりえたことが示される（六章）。さらに「自然」が「じねん」という「自ら」の意味をとる時、神の意志決定を主眼とするキリスト教的創造論と反発し合うが、他方で「しぜん」という「偶然」の意味をとる時、反発し合わないことにおいて、自然という両義的表現をめぐって神の摂理と世界の自然的な生成という両思想の邂逅が生起したことが示される。そこには日本倫理思想や文化がはじめて異質な他者・神の文化に出会った際に、言葉による関係の創成という問題の重要性が際立たせられていると同時に、本論文が現代日本に問いかけるインパクトが論述から迫り出していると言える。

以上のような内容で示された折井さんの比較研究について、その画期的な特徴や創見を次に挙げてみたい。

その第一は、何よりも「三重苦」と表明されたように（126頁）三重の比較研究にある。(i) まず、西欧中世の思想家トマス・アクィナスと近世人グラナダの比較、広義には西欧中世文化と近世文化との比較である。すなわち、一方では12世紀ルネッサンスを経て13世紀に文明的世界の観念の一つの総体（entitas）として完成した、ゴシック建築にも比すべきラテン中世、その表象的総体としてのトマスの『神学大全』であり、他方では新大陸の発見、ヒューマニズムの勃興、トリエント公会議、内なる異文化（ユダヤ、イスラム）、ポルトガル併合などに直面する近世的ス

ペインがある。折井さんはその両者の研究を踏まえて、その狭間の緊張関係にあるグラナダの倫理的実践的思想の性格を、トマス人間観の観想的性格との対比の上で見事に浮彫りにしている。(ii)次に、そうした近世スペインの表象と言えるグラナダと16 - 17世紀初頭にわたって開花した、所謂キリシタン文化との比較である。折井さんがここで用いる対訳分析の方法論とそこから導出される異文化間の交流と断絶に関する分析成果は、日本中世文学・文化史のみならず、今日的な異文化間交流という視点から見て特に研究上創見の光彩が窺われるところである。それは自由意志と恩恵、報謝、自然(じねん、しぜん)「~せずして叶はざる」(estar obligado)などの言語表現と日西語比較において顕著である。(iii)最後の比較は、そうした西欧と日本の文化的出会いが今日の日本あるいは通時的に語りうる歴史的日本と欧米、あるいは他地域との文明・文化的出会いにどのような意義を有つかという問いに関わる。但し、折井さんはこの比較を直接行わないが、論文全体の問題提示と比較の遂行がもつ迫力は、逆に読者に大きなヒントを与えてやまないのみならず、読者自らに問いとして迫る或るインパクトを有っている。以上だけでも注目すべき業績であるが、特徴の第二は、文化論的思想的次元にある。それは、ラテン中世・スペイン近世・さらにキリシタン文学が示す「創造者と人間とを絶対的に隔絶する 超越的論理」と、神仏を含む万物の「生成・生殖」に支えられる日本的アジア的な「連続的論理」との邂逅の比較分析である。折井さんは本邦で16世紀に生起した邂逅をめぐって恩寵・自由意思、他力・自力をテーマとして独創的にその意義を示している。

第三の特徴は、言語的文学的次元にある。(i)まず、中世思想と近世スペイン思想を形而上学から倫理学に至るまで理解するためラテン語とスペイン語が駆使されていることである。例えば、「報謝」概念における研究ではこの語学的分析が非常に生きている。さらに今日「日葡辞書」の文学的語学的研究にあってもラテン語の無知故、真面目な研究がなされていない点を考えると、折井さんはラテン語をも含め日葡辞典を検討し研究に深みを与えている。(ii)次にグラナダのフマニストとしての側面をも視野に入れ、彼の「修辞学」を深く研究している点は、本邦でも稀有である。以上のような文学的アプローチの独創的結実、ラテン中世・スペイン近世・キリシタン文化との対訳分析によく窺えるといえよう。

第四の特徴は、副題が示すように、西欧との比較において、日本文化の非形而上学的内在性やどこよりも増して顕著な審美的性格さらに他力的論理や或る種の論理的な性格などが浮彫りにされたと言える。

このような独創的研究の諸特徴を有つ本論文審査において諸審査員から次のような質問と研究上の意見が寄せられた。

まず第一に16 - 17世紀にわたるヨーロッパの全体像と殊にキリスト教の危機についての認識を一層深めると論文がますます生彩に富んでくることの指摘がなされた。次に何故この時代に修徳文学の隆盛をみたのかとの質問があり、文化史上この点を考察すべきことが勧められた。第三に本論がキリシタン史の思想的アプローチとして、また西欧との比較研究で画期的であるにしても、歴史的資料の全体的構造分析をやってから論を進めることが勧められた。さらにキリシタン時代の日本文化・精神史全般の研究も勧められた。

大略以上のような意見・示唆があったものの論文自体が日本・西欧近世に関する画期的な文化的思想史的研究になっているとの点で審査員全員の意見の一致をみた。

したがって、本審査委員会は折井さんに博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。